

Title	はじめに : 組織の終焉と研究の展開
Author(s)	松原, 正毅
Citation	大阪外国語大学論集. 37
Issue Date	2007-09-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80037">https://hdl.handle.net/11094/80037</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## はじめに——組織の終焉と研究の展開

2007年9月

大阪外国語大学研究推進室長

松原 正毅

組織としての大阪外国語大学は、2007年9月30日をもって終焉をむかえる。その組織内で遂行されていた研究活動は、今後も継続するだけでなく、さらなる展開をはからなければならない。『大阪外国語大学論集』最終号は、将来の研究の展開を願って編集されたものである。みずからの歴史をふまえながら、未来を展望する必要があるからだ。

『大阪外国語大学論集』最終号には、1927年から2007年までの80年間にわたる雑誌類を中心とした出版物の内容が網羅的に収録されている。これらの出版物は、すべて大阪外国語学校および大阪外国語大学を基盤として刊行されたものだ。その意味では、ひとつの組織の研究面での歴史の変遷を概観できる貴重な資料となっている。

80年におよぶ研究内容の記録を通観すると、研究成果の発表が断絶した期間が2箇所あることがわかる。ひとつは1943年から45年まで、ひとつは1947年から48年までである。前者は第二次世界大戦、後者は戦後の新制大学発足にともなって生じた混乱による空白期間であった。これは、当然のことながら、ひとつの組織が社会的変動の波と無縁には存在しえないことをしめしたものだといえる。

研究内容の記録からあきらかになるのは、1960年代後半から論文の数が増加していることである。これは、研究活動の活発化をしめすものだといえる。研究活動の活発化にともなって、研究領域も拡大している。発表された論文のテーマは、言語学や文学、歴史学、政治学、経済学、教育学、心理学などにおよぶ。これらのテーマのなかで中核部分をしめるのは、言語学と文学といってよいだろう。これは、大阪外国語大学という組織の性格からみて当然といえる。外国語という母語以外の言語運用能力をたかめるためには、言語学と文学の研究がひとつの前提になるからだ。

本来的に、言語運用能力は現生人類に固有のものとかんがえられている。現生人類が獲得した言語運用能力は、現在にまでいたる人類史の展開に決定的な影響をあたえた。言語運用能力の獲得が前提とならなければ、現代文明に直結する農耕や遊牧の生活様式の成立はありえなかったであろう。言語運用能力の獲得とともに生じた現象は、人類の抽象化能力の飛躍的な増大であった。蓄積した知識や情報を、言語運用能力によって他者や次世代につたえるだけでなく、より集約化しながら現実にはたらきかけをおこなうことが可能になったのである。このおおきな流れのなかで、農耕や遊牧の起源があったわけである。

最近の研究によれば、現生人類の祖先は20～25万年まえころアフリカ北東部の一角に出現したとされている。人類の言語運用能力に深くかかわる遺伝子FOXP2の発現は、20万年まえをさかのぼらない時期とかんがえられている。ひとつの可能性としては、現生人類の出現と言語運用能力に深くかかわる遺伝子の発現とはほぼ同時期であったともかんがえられるわけだ。もしそうであるとするならば、言語運用能力は現生人類にとって不可欠な要素といえるだろう。

いずれにしても、言語運用能力が人類にとってもっとも重要な要素であることは否定できない事実である。現在地球上に存在する6000から8000といわれる異なる言語間でそれぞれの母語を基盤としながら円滑なコミュニケーションを可能にする方策の実現化は、これからの課題のなかでも重要性をもつもののひとつとなるだろう。あらゆる意味で、言語研究の深化は不可欠といえる。

これからの言語研究においては、言語学や文学だけにとどまらないあらゆる領域からの積極的な参加が必要である。とくに、情報学や脳生理学、遺伝学などの領域との活発な共同研究を展開しなければならないであろう。総合大学としての大阪大学のなかに位置づけられた旧大阪外国語大学の研究資産が、本来的な意味で総合化されることによって、類例のすくない深化した言語研究の地平をひらく可能性がでてくるのではないだろうか。今後の研究の展開の一環として、このような方向性のかんがえておく必要があるようにおもえる。

『大阪外国語大学論集』最終号が、さまざまなかたちで有効に利用されることを期待している。あわせて、今後の研究のさらなる展開を祈願するものである。